

『二十四の瞳』 覚書

村野 克明

昨秋、ブログ「談話室」で壺井栄（1899.8.5-1967.6.23）（以下「栄」と表記）著『二十四の瞳』への書評（文庫所収の「解説」を含む）を少し紹介した。今回、手元のささやかな資料を用いて、その試みを続行する。ただし、多巻物の著作集ⁱは（後出の端本1巻以外は）未見。

「付加価値」をめぐる詮索はしないことにする。すなわち、口絵、挿絵、「注」（割注とか脚注とか）、登場人物一覧、「解説」、著者年譜、資料編、参考文献一覧、索引（人名・地名・事件名）などの扱いをどうすべきか、といったことなのだ。

以下、文庫版ⁱⁱ「解説」へのわが感想（ほとんどが不満）を列挙する。そのあとに「人生手帖」誌に載った辛口批評と、倉橋由美子、斎藤美奈子によるいかにも実作者目線の書評を紹介する。ラストは、昨年7月に刊行の『二十四の瞳』ロシア語版で締め括りたい。

■『二十四の瞳』文庫版「解説」への不満

——**文体論が希薄なのは？** テキストの引用によって文体の特徴を述べた「解説」がない。動詞のほとんどがひらがな使用だとか（表記上の工夫。幅広い年代層にアクセス可）、大石先生は生徒たちには「標準語」、自分の子供には方言と使い分けているが、そうしたコミュニケーションへの着眼がない。また、ナレーションの文体が「昔の教養のある日本婦人」の「絶滅種」の日本語だとは倉橋由美子（後出）の評価だが、そうした論議も「解説」には見られない。

——**作品構成論が皆無では？** 起承転結＝全4部構成の図式を当てはめると、第1部が「1.小石先生」から「4.わかれ」までで昭和4年（1929）の出来事。第2部は「5.花の絵」から「7.羽ばたき」までの昭和8～9年（1933-1934）。第3部が「8.七重八重」で「大東亜戦争」の昭和16、17年（1941-1942）。第4部は戦後の「9.泣きみそ先生」「10.ある晴れた日に」で昭和22年（1947）。作品理解に役立つような、こうした構成面での「解説」もない。

——**創作史上の位置は？** 『二十四の瞳』前後の栄の諸作品との関連性への検討がなされていない。太平洋戦争中の子供の心理をえぐった諸短編などとの相違面など、栄個人の創作史上『二十四の瞳』とは何なのか、といった問題意識が弱い（内容上、創作方法上の「展開」の問題）。

——**児童文学史上の位置は？** 栄自身は「児童文学は子供だけの文学」という意識がなく、例えば『二十四の瞳』が小学生から八十代までの読者層を有することが嬉しかったようだ。では、この作品は日本児童文学史上どのような位置にあるのか。他の作家の著作との比較検討など、その点を追求した記述がない。

——**フォークロア、「土着性」との関連は？** 栄は子供の頃に祖母から昔話をよく聞かされた、とのことだが、方言で語られる昔話をも含め、（小豆島の）フォークロアや「土着的」なものとの関連性について具体的な言及がない。

——**唱歌、オルガンの効用は？** 教室にせよ、戸外にせよ、この作品には「歌」があちこちで響いている。「荒城の月」のエンディングの場面は有名だ。が、この作品には幾つの唱歌が出てくるのか教えてくれるような親切な「解説」はほとんどない。個々の「歌」がプロットの中でどう機能しているのか、ソレを全部あげつらえとは云わないけれども。

——**笑いの効用は？** 『二十四の瞳』のなかには「哀しみの液化したもの」が大いに流れているとは倉橋由美子の卓見（後出）だが、一方、第三章「米五合豆一升」での「男先生」の「唱歌の時間」での悪戦苦闘ぶりには思わず笑いを誘われる。第七章「羽ばたき」のエンディングに「おかしさとかなしさと、あたたかさが同時にこみあげてくるような、そしてもっと含蓄のあること

ば」とある。倉橋はこのうちの「かなしき」を取り上げたわけだが、「おかしき」の方はどうなのか。詰まる所、「笑い」の効用を真正面から取り上げた「解説」など、見たこともない。「あたたかさ」に関しては「母ごころ」「母なる作家」への言及は若干あるけれども。

——「解説」は必要か？ 斎藤美奈子（後出）がこの作品について「師弟愛を描いた児童文学、戦争への抗議をこめた反戦文学、左翼っぽい思想のまじったプロレタリア文学。いろんな受け止め方のできる作品」と断じているが、一読さえすれば、この作品がこうした＜三面鏡の文学＞だとは誰にでも容易に感じられるだろう。「反戦文学」「プロレタリア文学」という用語がことさらに耳に痛く響くのなら「戦争も格差社会もまっぴら」に置き換えられようか。テキストを読めば明々白々なことが、何を今さら巻末の「解説」で繰り返し聞かされねばならぬのか。くどいかも。そんな「解説」なんて要らない？

——大石先生「降誕」の経緯は？ 意外なことに、作者の脳裡に一体いつ頃、どういう事情で「大石先生＝小石先生＝なきみそ先生」（「時代」と共に呼び名が変遷する）が「降誕」したのか、「解説」子はまるで注目しない。もっとも、これには作者自身の責任もあるのではないか。以下、『壺井栄作品集』九卷（筑摩書房、1957年1月刊）所収の栄自身の文章『瞳疲れ』から引用する（〔 〕内は引用者による補記。若干改行も加えた）。

「『二十四の瞳』は（これも書き飽きるほど何度も書いたことだが）ニュー・エイジという宗教的な雑誌に連載した^{iv}。係りの編集者だった坪田理基男[作家坪田謙治の息子]さんには随分迷惑をかけながら、[当初は健康を害していたこともあり]にじり歩くようにしてやっと書きあげたのだったが、更に筆を加えて光文社から出版した[1952.12.25初版発行。栄の短い「あとがき」と坪田謙治のこれも短い「解説」付き]。

いうまでもなく、戦後の作品だが、この題名だけは二十年も前から私の胸の中で温められていた。つまり私の両親に育てられた十二人の子供のことを、子供の側から童話として書いてみたいと思い、昭和十七年ごろだったと思うが、それを三省堂から出版する約束までした。ところが、まだ筆を下さない中に情勢が変り、出版する側でも計画だおれになったのだった。

しかし、いつかは書きたいと思っていたのが、その題名だけはそのまま、一つの家で育った十二人の子供の話ではなく、一つの小さな村に生れ育った十二人の同い年の子供の物語になったのだ。」（同書192、193頁）

ご覧のように、作者は12人の子供の像を20年間も胸裡に温めてきたのだが、いつ、どういきっかけで＜大石先生＞が作者の前に出現するに至ったのか、その事情を語ってはいない。

■『二十四の瞳』書評の紹介と感想

1) 「人生手帖」誌での『二十四の瞳』批判

月刊雑誌「人生手帖」^{iv}の『二十四の瞳』評のことは、昨年ブログ「談話室」2021/12/8「『二十四の瞳』批評三件」と2021/12/9「補足」とで言及した^v。

今回も、問題の書評「壺井栄の『二十四の瞳』」から引用したい。これは「人生手帖」第6巻第11号（文理書院、1957年11月1日発行）の92～95頁を占め、三段組の本文は400字詰め原稿用紙で14枚近くにもなる。署名は「近代思想研究会」。もしかすると、定期的な読書会の席での白熱した議論の成果（共通認識）を結実させたものなのかもしれない。（以下、適宜改行し引用する）。

引用文①

「もしもこの小説の中から、このふわふわと実体のない感傷、例えば、小学校唱歌に寄せる、そこはかとなき童心への郷愁のようなものを除いてしまったら、何があとに残るでしょう。おそらくそこには耐えがたく息苦しい現代の社会のみじめな生活が大きく口をあけているのがのぞかれることでしょう。

大石先生の受け持った十二人の児童のうち、男子五名は三名まで戦死し、一人は戦傷で失明して、今、あんま修業をしておそまきの出発をしようとしている。女子七名のうち、一名は大阪の奉公先で結核にかかり、嫁入り前の体を淋しく納屋の中でみとる人もなく死に、一人は夜逃げ同様に村を出て行方不明、一人は貧しさのために身を売られ、一人は歌手を志して何度も家出をしながら遂に夢を捨てて家に連れもどされ、ともかくも満足な生活を営み得た人は、小学校入学後十八年目にわずか四名にすぎない。

それらの人々は、十八年の長い生活の日々に、それぞれ語ればつきないきびしいつらい思いを経験したにちがいありません。おそらく、その一つ一つが日本の長い間の侵略戦争とかかわり合い、社会の動きともつれ合ってそれぞれの深い意味をあらわしているのにちがいありません。

だから、戦争が、このような惨禍を生み出し、戦後にその爪あとを深くのこしたのだと作者は主張しようとしているのですが、にもかかわらず作者は大石先生の教え子たちのたどった一つ一つの経験をえがいているわけではないのです。

だから、このようなひどい目にみんなあったのだ、といくら主張しても「これはひどい」という「ひどさ」の規準は、小学校一年入学当日の子供達の可憐な姿と、その子供たちを愛する大石先生の清らかな態度なのであって、つまるところは、罪、けがれのない子供の世界なのです。」

(上記巻号の93頁)

引用文②

「この小説の世界が今いったようなものであるとすれば、戦争という事実もまた師弟関係の場の中での事件としてしかえがきえません。戦争は主役なのではなくて、この小説の中ではほんの端役にすぎないのです。(中略)。

戦争はなかった方が良かったのだ。それは全くの話が、なんでもない当り前のことであり、かつ大変なことだということがこの小説ではえがけているのでしょうか。私には疑問だと思います。

この疑いは、作者が十二人の子供を、先生の目をとおしてしかえがいていないという点から生れるのです。おそらく、この小説がもっと後々の時代までを続いてえがいていたにしたところで、小説がつくり上げた世界の質が変わらない限りは八十才の大石先生と七十才の教え子たちという関係だけでしか人間関係が成立しないことでしょう。そこには一人の人間としてのおくつけき八十才の老婆と七十才の老人、老婆たちとがむき出しの人間くささを発散させながら登場するということはないでしょう。

つまりこの小説の世界は固定していて、その中での人間関係に何の変化も成長もないのです。(中略)。

とすると、人はこの小説を読むことによって、戦争という現実の惨禍におそれと、怒りと、それを拒否する力と決意を抱くかわりに、当りの柔い、甘い感傷のただよう美しいユートピアの世界にひきこまれてしまう危険が多いのではないのでしょうか。(中略)。

私たちがこの小説で泣かされ、感動させられたからといってこの小説の世界に全面的に足をすくわれてはならないのです。私達には、泣かされた、感動した、ということ自体をもう一度ふりかえってみるだけの知恵が必要なのです。」(同上巻の94, 95頁)

引用文①②に対する感想

——私の雑駁な感想は上記ブログですすでに述べたが、それにしても、引用文②の「作者が十二人の子供を、先生を目をとおしてしかえがいていないという点」への批判は、承服し難い。この筆者はどうやら個々の登場人物が「むき出しの人間くさを発散させながら登場する」という「本格」小説を求めているらしい。

引用文①では「作者は大石先生の教え子たちのたどった一つ一つの経験をえがいているわけではない」と断定しているが、つまりは、大石先生と十二名の教え子一人一人の人生行路を戦前・戦中・戦後にわたって徹底的に「深堀り」して描け、と大号令を掛けていると云ってもいい。今、うまい例えが思いつかないが、女性作家でいえば野上弥生子の長篇小説『迷路』タイプのものに書き改めよ、と要請している、とでも云おうか。

しかしながら、これで果たして作品自体と正対しているのか。作者の意図とその成果を正當に評価したもの、と云えるのだろうか。

むしろ、「作者が十二人の子供を、先生を目をとおしてしかえがいていないという点」に立脚したからこそ、子供たちと心を通わせ合えるく大石先生＝小石先生＝泣き虫先生という「教師像」を創造することができたのではないか。

「戦争」への態度という点では、これはどこの書評でも（文庫版の巻末の「解説」をも含め）誰も触れていないことだが、作品上梓の1952年（昭和27年）という年は実は「戦時下」にあった。朝鮮戦争（1950.6.25 朝鮮人民軍攻撃開始～1953.7.27 軍事停戦協定）が止んでいなかったのだ。『二十四の瞳』とは「戦後」ではなく「戦時中」の文学なのである。

2) 倉橋由美子『偏愛文学館』から

最初、倉橋由美子（1935-2005）の『偏愛文学館』（講談社、2005年7月刊）に『二十四の瞳』評があると知った時には違和感を覚えた。ずいぶん資質の異なる作家同士が対峙したものだな、と思ったからだ。が、読んでみて今度はその「偏愛」ぶりに意外な感じがした。と同時に、納得感というか「腑に落ちる」感じをも味わった。

なんとすれば、倉橋が、「昔」は「貧乏」「戦争」「病気」など「それやこれやで人生に別れが多かった」「『哀しい』ことが多かった」と指摘し、『二十四の瞳』は「純度百パーセント」そうした「哀しみが含まれている今時珍しい小説」だと断じたからだ。

ところが、そのあとのほうで倉橋はこうも書く。

——「人は運命のままに戦争に行き死に、貧に苦しみ、病んで死んでいきました。運命に従うほかない人間であることに哀しみの源泉があります。そう考えると、読者に『哀しみの液化したもの』を大いに流させるこの小説などは、実は筋金入りの反左翼的文学ではないでしょうか」。

「歴史の中の自由と必然」といった議論を持ち出すつもりはさらさらないが、「運命に従うほかない人間」という表現に私は引っかかる。『二十四の瞳』の価値を（昭和20年の敗戦に至るまでの）「大きな歯車が回っていた世界を描いている、という点に置くことには心からの共感を覚えるけれども。

倉橋の云うように「筋金入りの反左翼的文学」とは「運命に従うほかない人間」を描く文学であるとすると、（揚げ足を取るつもりはないが）これだと反対に「左翼的文学」とは「運命にあらがう人間」を描くものである、ということになる。だが、文学とはどんな人間をも受け入れるものだろう。「運命にあらがう人間」にせよ「運命に従うほかない人間」にせよ、どちらも等しく対象とするのではないか。

というような論法からすれば、「文学」という語句の上に「左翼的」とか「反左翼的」の形容句は不要であろう。ひょっとすると、栄が佐多稲子や宮本百合子と親しかったこと、栄の夫が壺井繁治であること、といった人間関係の事実が倉橋の筆に影響を及ぼしてしまったのかもしれない。

たしかにこの作品の主要な登場人物たちは「反権力の闘士」でも何でもない。が、この物語が（倉橋の云うように）「運命に従うほかない人間」を描いたものだ、としても、かといって、そういう人間の在り方を肯定した作品である、とは云えまい。

倉橋由美子のこうした書評については、上記「人生手帖」での書評と同様、昨年ブログ「談話室」2021/12/8「『二十四の瞳』批評三件」と、2021/12/9「補足」と、2021/12/13「『二十四の瞳』メモ」とでも言及した。本稿はその延長線上にある。

3) 斎藤美奈子『名作うしろ読み』から

繰り返しになるが、斎藤美奈子が、『二十四の瞳』は「師弟愛を描いた児童文学、戦争への抗議をこめた反戦文学、左翼っぽい思想のまじったプロレタリア文学。いろんな受け止め方のできる作品」であると簡潔に断定したこと（いわば三面鏡的構造の指摘）、そして大石先生の教え子の女子たちの「たくましさ」に注目したことは、他の書評子には見られない「フットワークの良さ」だと私は脱帽する思いがした。

以下、斎藤美奈子『名作うしろ読み』（中央公論新社、2013年1月刊）から引用する（すでにブログ「談話室」2021/12/22でも引用したが、以下、屋上屋を架す）。

——「師弟愛を描いた児童文学、戦争への抗議をこめた反戦文学、左翼っぽい思想のまじったプロレタリア文学。いろんな受け取り方のできる作品だが、大人になって読み直すと、軍国主義教育に嫌気がさして途中で教職を離れてしまった大石先生より、印象に残るのはむしろ七人の女子児童である。作者が描きたかったのも、そっちだったのではないか。貧しさゆえに奉公に出た子。口減らしのために身売りした子。七人の女子はたくましい。早苗の涙は女子を抑圧した時代への怒りにも思える。それに比べりゃ大石先生は、ただのひ弱な優等生だ。」（同書 59 頁）

——「まあでも、何よりドラマチックな終わり方はコレであろう。

<二人はそこにすべてを忘れて、感激の涙におせび合うたのであった>（『恩讐の彼方に』）

<早苗はいきなり、マスノの背にしがみついておせび泣いた>（『二十四の瞳』）

人の涙で終わるあられもないエンディング。ラストに涙が出てくると「途上感」は消え、むしろ物語の「閉じた」感が強まる。カタルシスってやつである。読者を泣かせるならともかく自分が泣いてどうすんだ、と思うけれども、なんだかんだいって涙は最強の武器なのだ。」（同書 294 頁）

■『二十四の瞳』ロシア語版について

この貴重な書物のことは昨年12月に同じくブログ「談話室」で紹介した。以下、それを再録する。

【目次】

翻訳者から読者のみなさんへ / 謝辞 / 壺井栄の生涯と作品 / 「まつりご」 / 「ともしび」 / 「妙貞さんのハギの花」 / 「柿の木のある家」 / 「坂道」 / 「二十四の瞳」

／「二十四の瞳」主な登場人物名一覧 　／訳注 　／日本語用語集 　／翻訳者・校正者紹介 　／参考文献。

【奥付】

著者 壺井栄 　／訳者 日本文化情報センター翻訳者グループ 　／編集 日本文化情報センター(ベラルーシ共和国ミンスク市ルシヤノワ通り45番地 ミンスク市立第5児童図書館内)
／発行日 2021年7月5日初版第1刷発行
／印刷・製本 赤間悟。

【扉】 ([]内は引用者による和訳)

Сакаэ Цубои - Двенадцать пар глаз: Сборник японских рассказов и повестей.

[壺井栄「二十四の瞳」日本の中・短編小説集]

二十四の瞳 壺井栄ロシア語訳作品集

Перевод с японского Группы переводчиков Инфоцентра японской культуры

[(ミンスク在の)日本文化情報センターの翻訳者グループによる日本語からのロシア語訳]

Сендай[仙台] 2021

——本書(非売品)の編集者はベラルーシの首都ミンスクにある「日本文化情報センター」である。代表者の辰巳雅子氏の話では、印刷・製本を担当した赤間悟氏(元印刷会社勤務)は仙台在住とのこと。よって扉に「仙台、2021年」とある(ミンスクと仙台は姉妹都市の間柄だ)。同「センター」はミンスクの出版社に対してもっと大部数で公刊できないものかと打診中である。本書は発行部数が15部。日本では国会図書館と小豆島の壺井栄文学館でしか見ることができない。

最後に、「7. 羽ばたき」のエンディングの個所を引用したい(日本語テキストは岩波文庫版190~191頁から)。小学校卒業直後に大石先生の自宅に挨拶に訪れた教え子の竹一(中学へ進学)と磯吉(大阪へ奉公)との「別れ」のシーンである。

村のはずれの曲り角にバスの姿が見えると、磯吉はもういちど帽子をとっていった。

「せんせ、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゅ。」

いかにも、それは鸚鵡(おうむ)のようなぎごちなさだった。いいおわるとすぐ帽子をかぶった。大人ものらしい鳥打帽は漫画のこどものようではあったが、似合っていた。新しい学生帽と二つならんで、バスのうしろの窓から手をふっていた二人を、見えなくなるまでおくと、ゆっくりと海べにおりてみた。静かな内海をへだてて、細長い岬の村はいつものとおりに横たわっている。そこに人の子は育ち、羽ばたいている。

——ながながお世話になりました。そんならごきげんよろしゅ・・・

岬にむかってつぶやいてみた。それはおかしさとかなしさと、あたたかさが同時にこみあげてくるような、そしてもっと含蓄(がんちく)のあることばであった。

Исокити снова снял шляпу, когда увидел автобус на повороте за деревней.

—Сэнсэй, спасибо, что заботились обо мне долгое время. Всего вам самого хорошего.

Он произнёс натянуто, словно попугай, повторяющий чужие слова. Сказав это, мальчик надел шляпу. Она была слишком взрослой для него и делала его похожим на героя манги, но ему шло. Две шляпы, одна из которых была новенькой фуражкой, виднелись через заднее стекло автобуса. Мальчики махали ей руками, пока автобус не скрылся из вида. Тогда Оиси спустилась к морю и

стала смотреть на тихий залив. Деревня Мисаки на втянутом мысе стояла как обычно. Там вырастали дети и вылетали из родного гнезда.

—Спасибо, что заботились обо мне долгое время. Всего вам самого хорошего... —учительница смотрела на мыс и бормотала про себя. Фраза эта одновременно содержала и комичность, и грусть, и теплоту — такие чувства нахыннули на Оиси. В этих словах скрывался глубокий смысл.

『二十四の瞳』を4部構成とすると、1～3部（「1.小石先生」～「8.七重八重」）が昭和「前期」だ。この時代、治安維持法下の検閲体制によって多くの作家や編集者らが「泣かされた」。今日のベラルーシも同様の事態だと聞いた。『二十四の瞳』ロシア語版がベラルーシの出版社から無事に刊行されることを願ってやまない。

末筆ながら、辰巳雅子氏を中心とするミンスクの「日本文化情報センター翻訳者グループ」と、印刷・製本を担当した仙台の赤間悟氏に対して、心から感謝申し上げます。

(2022年1月28日、東京にて)



注 (以下敬称略)

ⁱ ウィキペディアの「壺井栄」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/壺井栄#著書> を参照。

それによれば多巻物の著作集は以下の通り。

——『壺井栄作品集』全25巻（筑摩書房、1956～59年）、『壺井栄児童文学全集』全4巻（三芳悌吉等絵、講談社、1964年）、『壺井栄名作集』全10巻（ポプラ社、1965年）、『壺井栄全集』全10巻（筑摩書房、1968～69年）、『定本壺井栄児童文学全集』全4巻（講談社、1979～80年）、『壺井栄全集』全12巻（鷲只雄編集・校訂、文泉堂出版、1997～99年）。

ii 以下の文庫「解説」を参考にした（文庫名、発行年、解説者名と列記）。
——①新潮文庫、1957年初版、1992年71刷、小松伸六。②角川文庫、1961年初版、2011年改版第7版、窪川鶴次郎。③岩波文庫、2018年第1刷、鷺只雄。④偕成社文庫、1976年初版1刷、2009年改訂2版18刷、山室静。⑤フォア文庫、金の星社、1980年第1刷、1996年第50刷、松尾不二夫、壺井繁治。⑥青い鳥文庫、講談社、2007年第1刷、2013年第11刷、浜野卓也。

iii 雑誌「ニュー・エイジ」（発行所：ニューエイジ社、発売所：教文館。両社は銀座の同じ住所）に『二十四の瞳』が掲載されるに至る経緯については岩波文庫版「解説」によれば、以下の通り。坪田譲治（1890～1982）の「三男、理基男は入社早々『ニュー・エイジ』（中略）の編集にまわされたが、雑誌の編集経験などは初めての新米社員で一往六回程度の連載小説の企画は考えたが、さて誰に書いてもらうかという作家の人選の段階で考えあぐねてしまった。（中略）それで父の譲治に相談すると『それは壺井栄さんが最適』ということで紹介状を書いてもらって原稿を依頼に行き、執筆を快諾してくれた。」連載は同誌昭和27年（1952）2月号から始まり11月号までで完結。11月号「編集後記」に「壺井栄女史の『二十四の瞳』好評裡に完結。」とある。執筆者は村岡花子（1893～1968）。実は村岡は同年第4号から同誌の「編集人」となっていた（奥付による）。編集責任者の村岡が栄とどんな交渉を持ったのか興味あるところだ。

iv 「人生手帖」は文理書院創業者の寺島文夫が主筆の月刊雑誌（編集後記では「人生雑誌」と自らを性格づけている）。1952～1974年の発行。編集者は寺島が代表を務める「働く青年のサークル『緑の会』」。国会図書館のデジタルコレクションで1952～1959年に限って閲覧したが、これは全国の読者からの寄稿を中心とした文集＝雑誌である。ただし毎号数名の作家、哲学者、宗教家などが執筆している。その顔ぶれは以下（順不同）。

——柳田謙十郎、三浦つとむ、寺島文夫、野間宏、赤岩栄、岡邦雄、太田典礼、安井郁（ロシア文学者安井侑子の父）、亀井勝一郎、堀田善衛、橋本英吉、高桑純夫、青野季吉、真下真一、丹羽文雄、中野好夫、中島健蔵、正宗白鳥、金達寿、淡徳三郎、舟木重信、森田たま、松岡洋子、清水幾太郎、藤島宇内、大熊信行、赤木健介、高橋庄治、住井すえ、林田茂雄。

v ブログ「談話室」 <https://suigenchi.bbs.fc2.com> を参照。そこには書かなかったが、この批評は「人生手帖」誌の「文学に書かれた青年像」というシリーズの「第10回」に該当する。各回の冒頭の署名は「近代思想研究会」だが、文末に筆者名を明記。国会図書館デジタルコレクションでは、「人生手帖」1957年4月号から1958年1月号までのこのシリーズの連載は、以下のラインナップとなっている。

——第3回：島崎藤村『春』（佐藤勝）、第4回：夏目漱石『こころ』（住田利夫）、第5回：山本有三『路傍の石』（田丸太郎）、第6回：宮本百合子『伸子』（森健）、第7回：島木健作『礎』（佐藤勝）、第8回：石坂洋次郎『暁の合唱』（太田紀代子）、第9回：早乙女勝元『下町の故郷』（住田利夫）、第10回：壺井栄『二十四の瞳』（田丸太郎）、第11回：半田義之『国鉄幹線』（佐藤勝）、第12回：獅子文六『大番』（筆者名不明）。——1957年以前の各号の＜目次＞もまた自宅で検索できるのだが、それでも「第1回」「第2回」分の所在が掴めなかった。国会図書館の所蔵に欠号があるためかもしれない。（なお「人生手帖」誌の＜本文＞の方は著作権の関係で自宅からはアクセスできない。国会図書館でのみ閲覧可能である、パソコン越しのデジタル資料としてだが）。